

絵本の翻訳

三宅茜巳

文学部英文学科

(1999年9月2日受理)

Translations from English Picture Books into Japanese

Department of English Literature

Akemi Miyake

(Received September 2nd, 1999)

1. 『200匹のウサギ』

旅の途中、僕はジャメスの国を通りかかった。丘の上から谷を見下ろすと、真ん中に森があった。森の横には、この国の王様のお城がたっており、お城は、いっぱいの水をたたえた堀に、取り囲まれていた。

反対側には、石と木で作られた小屋があり、屋根はわらでふいてあった。

誰かが、その小屋のわきの畑を、耕していた。

僕は、野菜が大好きだ、とくにレタスがね。そこで、もっと近くへおりていった。

畑を耕していたのは、ひとりの若者だった。若者は口笛を吹き、歌を歌いながら、畑を耕していた。

畑は、いままで見たことがないほどきれいに、整えられていた。

「ふーむ」僕は思った。「この若者は、たぐいまれな人に違いない。きっと、なにか素晴らしいことが、彼の身におこるに違いない。」

僕は、しばらく、ここにとどまろうと決心した。ずっと、このまま、見つからないように眺めていられたら、どんなに愉快だろう。

畑は、丈夫な柵で囲まれていたので、僕は、その外にじっと立っていた。しかし、若者は、レタスの苗床をきれいに手入れしてしまうと、僕が埋ってしまうほど、レタスを投げてよこした。それで、暗くなってから、僕は、そのレタスを食べた。

次の朝早く、若者は、森をぬけ、王様のお城へと出発した。おながすすいたら食べようと、ソーセージを持っていった。僕は、急いで若者のあとを追いかけた。はなされないように、見つからないように。

森をぬけてしまうと、見つからないように、あとをついてゆくのは、簡単ではなかった。それで、若者が、僕の方を振り返って見たとき、僕は、どこか別の方向へ行くようなふりをした。

若者は、お城の堀についた。衛兵は、つり上げ橋のところで、若者を押しとどめて、尋ねた。

「何の用だ。」

「今日は お城のお祭りの日ですね。」

「さよう」と、持っている旗ざおのように、こわばった表情で、衛兵は答えた。

「王様を、楽しませてあげたいのですけれど」と若者は言った。「そうすれば、王様は、僕をめしかかえて下さるかも知れない。」

「ほお？」と衛兵は片一方の眉をあげた。「それで、王様を楽しませるために、何ができるのだ？」

「僕、誰よりも長く逆立ちができます。」

「そんなことでは、王様は、お喜びにはなりませんまい」と衛兵は言った。

「僕、誰よりも速く、スケートがすべれます。」

「夏にかね？」衛兵は、もう一方の眉を上げた。

「泳ぐ、ことなら……。」

衛兵は首を横に振った。

「それなら、みんなは、王様を楽しませるために、どんなことをするのですか？」若者は尋ねた。

「歌を歌うものもおる」衛兵は言った。

若者は、森へは行ってゆき、歌の練習をした。しかし、若者が歌うと、森中の鳥達は、怖がって、飛んでいってしまった。僕だって、耳をふさぎたくなったほどだ。

「これじゃあダメだ」僕は思った。「何か、もっといいことを考えなきゃあ！」

若者は、再び、衛兵のもとにゆき、尋ねた。「王様を楽しませるために、みんなはほかに、どんなことをするんですか？」

「楽器を演奏するものもおる」衛兵は答えた。

若者は、家へヴァイオリンを取りに戻ると、再び森にはいり、ヴァイオリンを弾きはじめた。リスとキツネとオオカミがやってきて、若者をののしったが、僕は黙っていた。若者を追いかけて走ってきて、まだ息が切れていたのだ。

「これもダメだ」僕は思った。お城からは、お祭りの音が聞こえてくる。「お祭りが、終わってしまったわいうちに、何か素敵なアイデアを考えださなくては！」

若者は、ヴァイオリンを家におきに帰ると、またしても、衛兵のもとに走ってゆき、息をはずませながら、尋ねた。

「ほかに、どんなことをするのですか？」

「曲芸をするものもおる」衛兵は答えた。

お祭りは、もう半分終わってしまったようだ。若者は、お城の中庭から聞こえてくるはしゃぎ声に、耳をかすこともなく、急いで森にはいってゆくと、曲芸のけいこをはじめた。

若者は、棒と石と古い松かきを手にとって、まわしはじめたが、どれも若者の手をすりぬけ、若者の頭に落ちてきた。鳥や動物達は若者を見て、あざけりわらった。

若者は、倒れていた丸太に腰をおろした。僕は胸が痛んだ、若者があまり悲しそうだったから。すぐにも、お祭りは終わってしまうだろう。そうして、若者は、王様を楽しませる機会を、失ってしまうだろう。

突然、そこに、一人の老婆が立っていた。

老婆を見ると、若者は、さっと立ち上がり、会釈をした。

「悲しそうな顔をしておる」と老婆は言った。

若者はほほえむと、「そういうつもりではないのですが」と答えた。「ここに座って、おやすみになりませんか？」

「ありがとう、そうさせてもらおうかね」老婆は言った。

二人は、並んで丸太に腰を下ろした。

「なにか困ったことがおありだね」老婆は言った。

若者は溜息をついた。「人生ってやつは、思っていたほど簡単なものじゃないってことに、世の中にでてみて、はじめて気がつきました。」

「わけを話してごらん」老婆は言った。

わけを話しながら、若者は、持ってきたソーセージを、半分、老婆に分けてやった。若者は、大きいほうを、老婆にやった。老婆の、痩せてとがった顔を見て、老婆が腹をすかせていると、若者は思ったようだった。

若者が話し終わると、老婆は言った。「王様を喜ばせようと思うのなら、まだ誰もしたことのないようなことを、して見せなくてはならんう。」

「ええ」若者はいった。「でも どうな？」

「楡の木で、笛をこしらえる方法を、知っておるかね」老婆は尋ねた。

「ええ、もちろん」若者は答えた。「だれだって知っているでしょう？」

「やってみせておくれ」老婆は言った。

若者は楡の木を見つけた。笛を作るのにちょうどよい大きさの、なめらかな枝が、何本か見つかったが、一本の特別な枝が、まるで若者の目を捕えたかのように見えた。そのあいだ、ほかの枝たちは、声をあげず、静かに黙っていた。

若者は、そのうっとりするような枝を、ナイフで切り取ると、手ごろな大きさに切った。

老婆は、若者のすることを、鷹の目のように鋭い目で見つめていたが、若者が枝を切りとり、刻み目をつけ、薄くそいで、歌口をつけると、満足げにうなずいた。

「みごとなもんだなあ！」と僕は思った。こんな笛、いままでみたことがない。

「吹いてごらん」老婆は言った。

若者は、吹いた。木の皮をえぐって空けた穴を、指で押さえながら、歌口に、息を吹き込むと、若者はある旋律をかなでた。

その音色を聞くと、森中のウサギが、走り出て、若者の方へ群がってきた。

「魔法の笛だ！」若者は叫ぶと、こおどりして喜んだ。

「お吹き、もう一度」老婆は言った。

若者は吹いた、すると、ウサギは、兵士のように整列した。

ウサギは、20列に並んだ、それぞれの列に10匹づつ、しかし最後の列だけは1匹たりない。最後の列だけは、9匹しかいなかった。

「チッ」老婆は舌打ちをした。「なんということだ。199匹のウサギなんて。きりのわるいことだ。すまないね。」

「そんなこと、かまうもんですか。ほら、こんなに、すばらしいじゃありませんか。」若者が、ウサギを見ると、ウサギも若者を見た、まるで、若者のゆくところなら、どこへでもついていきますといわんばかりに。

「きを一つけ！」若者は叫んだ。

ウサギは、直立不動の姿勢をとった。まるで、本物の兵士みたいに。

「まえーすすめ！」

ウサギは、森をぬけ、王様のお城まで行進した。若者は、先頭に立って歩いたが、ウサギが遅れないように、歩幅をゆるめて、歩いた。若者は、はずむような軽い曲をふきつつ、うなずいたり、会釈をしたりして、老婆にお礼をいった。

僕は、たいそう興奮したので、からだかふるえたほどだった。なんてすてきなんだろう、ウサギが行進するなんて。ああ、でも、もう遅すぎるのでは？ お祭りは終わってしまったのでは？ なんとか間に合ってくれますように！

森をぬけて、ウサギは、進んでいった。あんまり楽しそうなので、僕も行進に加わりたくなかった。でも、ここじゃあ、僕はよそ者だ。それに、老婆の魔法は、僕にはきかない。

お祭りは、まだ、終わっていなかった。お城の中庭から、ウサギの行進を見に、出てきた人たちもいたが、逆に中庭には行って行ってしまった人たちもいた。

王様は、お城の窓から外をながめて、ウサギの信じられないような行進を見た。王様が、手まねきしたので、ウサギは、つり上げ橋をわたって、中には行っていった。それで、僕もついて中にはいった。人ごみにまぎれて。

王様は、部屋から中庭におりてきて、閲兵をするときのように、王座に腰をおろした。

さわぎにまぎれて、僕は、後ろから、王座の下に、はいりこんだ。そこはだれの邪魔にもならなかったし、眺めもよかった。

「止まれ！」と王様は、突然叫んだ。

若者は行進をやめ、笛の音もやんだ。

「最後の列がいかん」王様は怒って言った。「数がそろっておらん！」

「おおせのとおりでございます、陛下」若者は答えながら、頭をひくくたれた。

「見苦しいではないか」王様は苦情をいった。「ふぞろいはいかん、最後の列の9匹を連れて

ゆけ！」

「しかし、陛下」若者は言った。「そんなことをしたら、ウサギは、悲しみのあまり、胸が張り裂けてしまいます！」

「ふーむ」王様はいった。「ありうることじゃ。うーん.....ならばウサギをもう一匹！」

「しかしながら、陛下」若者は言った。「森には、これ以外にただの一匹も、ウサギは、残っていないのでございます。」

「おお」君主はそういうと、しかめ面をした。そして、頭をグイとそらせて、考えた。そのあいだ、僕は、かたずをのんで、待っていた。

やがて、「ならば、**みんな立ち去れ!**」王様は、大きな声で叫んだ。

もう迷ってはいられない。こんなところに座って、見ている場合じゃない。

僕は、王座の下からびよんととびでると、最後の列の、あいている場所に、はねていった。

これで、万事、解決だ。

若者はほほえんだ。そして、さっきやめたところから、また、笛を吹きはじめた。行進を続けるよう合図をした。僕たちは、王様の目の前を行進した。王様は、拍手をしながら、叫んだ。

「これで、わしの宮廷は、世界中に知れわたるぞ！」

ああ、僕ですか、僕、もう、旅は、あきました。

2. 『クリスマスのクジラ』

その年、北極では、凍^いてついた、身を切るような、ひどい風が、吹き荒れていました。雪の吹きだまりが、サンタの氷の家のまわりに、山のように積もり、突き出た赤い煙突は、まるで、クリームパイの上ののった、赤いサクランボのようでした。家から、外に出るためには、積もった雪の中に、トンネルを掘らなければなりません。しかも、雪は、ちっともやみそうになかったので、サンタは、毎日、そのトンネルを、長くしなければなりませんでした。

「88年の、あの大雪より、ひどいようだて」と、ある日、長いトンネルから出てきたサンタは、言いました。

困ったことに、こんな天気なので、トナカイのブリッツェンは、急に、背中に寒けをおぼえ、アスピリンと、熱いお茶と、お湯の入った魔法瓶をかかえて、ベッドにはいってしまいました。

弱ったことに、ヴィクセンは、トランプ占いの途中で、

それから、コメットは、フルートの練習をしていて、

そして、サンタのトナカイは、どれもみんな、次から次へと、背中に寒けをおぼえ、アスピリンと、熱いお茶と、お湯の入った魔法瓶をかかえて、ベッドにはいつってしまったのです。ひどい、インフルエンザに、かかってしまったのです。

「雪はやみそうにないは、風は吹き荒れるは、こんな寒さで、おまけにトナカイたちが、みんなインフルエンザとは」とサンタは嘆きました。「しかも、クリスマスは、すぐ目の前にせまっているというのに！」そこで、サンタは、机のところにすわり、医者に電話をして、言いました。「犬ぞりを用意して、すぐに、来て下さい。大至急！」

医者が、サンタの氷の家に入ってくると、サンタは、医者のおしりにくっついて、ベッドからベッドへ、心配そうに、トナカイたちを、のぞき込んでいました。

「なに、たいしたことはありません、最後のトナカイの検温をおえると、医者は言いました。「2、3週間寝ておればなおるでしょう。大丈夫ですよ。」

「大丈夫だって」、サンタは、絶望したように両手をこすりながら、叫びました。「大丈夫なわけないじゃろう、一週間先にクリスマスがせまっているというのに！しかし、何という大災難じゃ！わしはどうしたらいいのだ？誰がわしのそりをひいてくれるのだ？これは、大災難じゃ！」

「大災難じゃ」、医者が、帰ってゆくと、サンタは繰り返し言いました。「なんとも、ひどい、大災難じゃ。」そして、あんまり、くよくよ考え込んでいたので、ミセス・サンタが、お昼御飯ですよと、4回も呼んだのに、サンタには、ちっとも聞こえませんでした。

「さあさ、そんなにがっかりしないで、冷めないうちに、スープを召し上がれ」と、ミセス・サンタは言いました。「まだ、8日あるじゃないですか、その間に解決できますよ。」

「あと、8日」、夕食後、サンタは、悲しげにつぶやきました。「ほんとうの大災難じゃ。」
「煙突が待っておる！」

「靴下が待っておる！」
「世界中のクリスマスツリーが叫んでおる！」
「まさに、大災難的大災難じゃ！」

こんな具合に、サンタは、嘆き悲しみながら、氷の家の中を、行ったり来たりしていましたが、なにもいい考えは浮かびません。一方、サンタの友人である、北極の動物たちの間では、ひどいインフルエンザと、もうすぐそこまで来ているクリスマスの話で、もちきりでした。

「かわいそうなサンタさん」、動物たちは口々に言いあいました。「こんなことは、この500年間ではじめてのことだわ。大きな倉庫に、うずたかく積まれているおもちゃや、贈り物は、どうなるんでしょう？サンタさんをたすける方法を、何か考えなくっちゃ！」

「ああ、ハスキー犬はいいました。「もし、僕たちが空を飛べるのなら、サンタさんのそりをひっぱって、大空をかけてゆけるのになあ！ でも、僕たちには空を飛ぶことはできない、残念だなあ」

「ああ、とシロクマはいいました。「もし、おいらたちがイルカのように泳げるのなら、そりをボードにして、波間をひっぱってゆけるのに。でも、おいらたちは泳げない。残念なことだ。」

「ああ、とセイウチとアザラシはいいました。「もし、わたしが、風のように速く駆けぬけることができるのなら、世界中、そりをひいてゆけるのにう。でも、わたしには、そんなに速く駆けることはできない。残念無念。」

「わたしたちカモメは」とカモメはいいました。「もし、わたしたちがアホウドリのように力が強ければ、そりがひけるのに。でも、わたしたちには、そんな力はない。残念だわ。」

「えへん」と魚の中でも、最も良識にとんだタラがいいました。「善意だけでは、サンタさんをたすけることはできない。必要なのは実行可能なアイデアさ。そして、いいかい、僕にはそのアイデアがある。」

タラがサンタを呼んだ時、サンタは、まだ、氷の家の中をいったり来たりしていたのですが、タラが呼んだので、氷の海の縁まで、やってきました。そこで、タラはいいました。

「歩きまわりながら、ぶつぶつぶやくのは、しばらく、やめて、僕の話聞いて下さい。そうすれば、あなたの心配事など、驚いたイワシの群れのように、さっと、どこかへいってしまうでしょう。あなたが捜していらっしゃるのは、何かとても速くて、力があって、クリスマスのプレゼントを、世界中に運んでくれるものなのではないでしょうか？教えてあげましょう。それは.....クジラです。クジラの背中氷山のように広く、クジラは、荒れ狂う波にも負けにくいくらい強く、風のように速く泳ぐことができます。行って、クジラに頼んでみてはいかがですか？」

「タラくんよ」とサンタは言いました。「お前は、海の中でもっとも賢い魚にちがいない。わたしは、クジラに会いに行ってくるよ、今すぐにな。」

クジラは、はるか沖合いの灰色の波間で、ひとりたわむれていたのに、サンタが、口笛をふいたり、足をドンドン踏みならしたり、大声で叫んだりしたのに、全然聞こえませんでした。やっと、夕食のころになって、クジラはサンタのことに気が付くと、急いで、サンタのいるところまで泳ぎましたが、勢いで、冷たい波をザブンとおこしてしまったので、サンタはずぶぬれになってしまいました。

クジラは、本当に親切だったので、すぐにサンタの頼みをききいれてくれ、サンタがわけを話すと、あっさり、こう言いました。「用意はできています。出発はいつですか？」

すぐ、その翌日のことです。サンタは嬉しそうに手をこすりながら、セイウチやアザラシ、シロクマやカモメがやってきて、大きな倉庫にうずたかく積まれたクリスマス・プレゼントの山を、運び出してくれるのを、見ていました。ひとつ、ひとつ、プレゼントは.....

水際に運ばれて.....

親切なクジラの、広い背中の上に、再び、新しいプレゼントの山となって、積まれてゆきました。

沢山の箱が積み上げられ、そのたびに、クジラは、だんだん、深く、水に沈んでゆきます。

「その線を越えないで」クジラは警告しました、「その線より下に沈むと、息ができなくなってしまうのよ。」プレゼントは、最後の小さな箱一つを残すだけとなりましたが、クジラは、怖がって、どうしても、それを、うずたかく積まれた山の上に積ませてくれませんでした。そして、プレゼントはみんなクリスマス用の、きれいなリボンで、落ちないように、きちんと結ばれました。

「それは、来年にとっところ」とサンタは言いました。

シロクマと、セイウチと、アザラシと、カモメと、ミセス・サンタに見送られて、

サンタと、親切なクジラは、出発しました。

サンタはとても幸せだったので、航海の間中、口笛で、ジンゲルベルを、吹いていました。最初の停泊地はニューヨークでした。

ニューヨークに着くと、水先案内人が、親切なクジラの頭に登り、港まで誘導してくれました。二せきのタグボートも近づいてきて、埠頭までクジラを押し送ってくれました。

埠頭は、すぐに、アリの巣をつついたような、さわぎになりました。小さなおとこたちが、大きなクジラの背中からおろした荷物をかかえ、忙しそうに、あちらこちらに、走り回っています。税関のお役人たちは、寛大なえみを浮かべて、おとこたちの仕事ぶりを見つめており、税関のために、ただの一箱も開けてみようと、しませんでした。

ニューヨークを出ると、サンタと親切なクジラは、南アメリカをまわり、

アフリカと、ヨーロッパを經由して、

オーストラリアに向かい、それから.....

すっかりくたびれてしまいましたが、とても、幸せな気分です。北極の我が家にたどり着きました。ひどい、インフルエンザにもかかわらず、プレゼントはみんな、

いままでどおり、ちゃんと、クリスマスに間に合うように、届けられたようです。

親切なクジラにとって、北極海が、こんなにも爽やかに感じられたことは、いまだかつてありませんでした。それと、同じように、サンタにとっては、ミセス・サンタが用意してくれたネギのスープが、こんなにもおいしく感じられたことも、いまだかつて、ありませんでした。

「じっさい」、ミセス・サンタに、温かいスリッパをはかせてもらいながら、サンタは言いました。「クジラの背中にのって旅をするというのは、すばらしく重宝なものだということが、わかったよ。サンタのそりをひく、トナカイの話や写真が、こんなにたくさんでなかったなら、もっと、ひんぱんに、のせてくれと、あの親切なクジラに、頼みたいくらいじゃ。そおなればじゃ、クリスマスカードには、そりを駆るだけではなく、見事にクジラをのりこなす、わしの姿が、描かれるじゃろう。そうなったら、クジラたちは、目一杯おめかしをせんとな。」

3. 『みどりのウシ グレタ』

しろい ウシが おる、

くろい ウシ、
しろじに くろい はんてんの ついた ウシ、

スベスベの ちゃいろい ウシや、
モジャモジャの ちゃいろい ウシも おる。

けれど グラタは みどりいろ、
ずっと はなれて、
たった ひとりで、

イングランドの みどりの たにの、
みどりの まきばの、
みどりの かたすみに、
すんでおった。

ほかの ウシらは みんな みでの とおり まっしろな ミルクを だす。

でも グレタの ミルクは みどりいろ、
「みどりの ミルク そんなモーの きいたことモー ないモー」
ほかの ウシらは いいおった。

「だれが みどりの ミルクなんぞ のむもんじゃ」と のうじょうしゅは なげき、
「わたしは いやよ」、「おれは いやだぜ」、「わしゃ のまん」、みなが くちぐちに いい
おった。

「ぼくの コーンフレイクに かけちゃ いやだよ」と トーマスが いい、
「わたしの ライスプディングに まぜないで」と ジェーンがいう。

「あたしの おちゃんには、よしとくれ。」
「ぼくの おさらには いれニャーで。」

そこで のうじょうしゅ グレタの みどりの ミルクを ぜんぶ ドブに ながして し
もうた。

ほかの ウシらは みんな グレタに せを むけて くちを きこうともせん。

そんな わけで グレタは その なつ いっぱい たった ひとり じゃった。それから
あるひ のうじょうしゅが まきばに やってきて いいおった。「なつは おわりじゃ。」

のうじょうしゅ ウシらを なやへ つれて ゆく。グレタの ことは すっかり わすれ
た。

むれからはなれて みどりの まきばの ずっと おくに たった ひとりで たっていた
グレタの ことには きが つかない。

そのよる はげしい あらしが みどりの たにを ふき あれた。

ゆきは おおう おかを まきばを。ゆきは まいこむ グレタの みみに めに。そして、
グレタの せなかに ふり つもる。

よくあさ たには いちめんの ゆきのほら。

そして グレタは きえて しもうた。

ウシらは なやの まどから そとを みて、
「なんて うつくしい たに でしょう。」
ウシらも わすれた グレタの ことは。

めを とじて、ねむろうとした グレタは かんがえた。
「かまわないわ また いつかは なつに なるんですモーの。」

にさんしゅうかんすると あたたかく なってきた。

そして ゆきが とけ はじめた。

たいようは ゆきを とかす おかの まきばの。そして、グレタの せなかの ゆきもとけだした。

ゆきが とけて おかも たにも みんな また みどりいろにもどったけれど グレタは ゆきのように しろいまま。

のうじょうしゅは なやの とびらを あけ ウシらを みどりの まきばに だしてやる。ほかの ウシらが グレタの まわりに あつまるが グレタは どのウシよりも まっしろい。

「ミルクを だして みなくちゃ わからんモー」ウシらは いう。

「だれモー みどりの ミルクなんて ほしく ありません からね。」

ミルクしぼりの じかんに なると ウシらは みんな まちかねた。グレタが さいしょ。バケツの なかに ながれた ミルクは みたこともないほど まっしろの ミルク。

「こりゃ どうだ」のうじょうしゅは いいおった。

「こげな しろい ミルク みたことねえ。」

ほかの ウシらは グレタの ことが うらやましくて うらやましくて あんまり うらやましがったので ツヤツヤの しろい からだが ぜんぶ みどりいろに かわって しまうた。

のうじょうしゅが ウシらの ミルクを しぼってみると なんと ミルクも みどりいろ。

のうじょうしゅは おこって いう。

「こげな ミルク だあれも ほしがらん。」そして しぼった みどりの ミルクを ぜんぶ ドブに ながして しまうた。

のうじょうしゅは ほとほと こまりはて「なんぎなことじゃ」。けれど グレタは まったく へいきだったとき。

注

使用したテキストは以下の通り。

Two Hundred Rabbits by Lonzo Anderson and Adrienne Adams, A World Work Children's Book World's Work Ltd The Windmill Press, 1968

岐阜女子大学紀要 第29号 (2000.3.)

The Christmas Whale by Roger Duvoisin, Alfred A. Knopf, New York, 1945

Greta the Green Cow by Roger Smith, Oxford University Press, 1982

なお、この翻訳を掲載することに対しましては、版權を御持ちの「新世研」様より、快諾を頂きました。ここに、謝して御礼申し上げます。